

研究に先見性を

所長 鈴木 弘

アメリカが今日開発すべきニューフロンティアは海洋である。というのは有名なケネディアピールであるが、実に 1961 年に一国の指導者により宣言されているのである。1966 年以降は毎年 1000~1200 億円程度の巨額の予算が海洋開発のために注ぎこまれて来ている。日本の現状と較べれば、はるかに先行していることを認めざるを得ない。海洋開発は単なる政治の問題ではない。それに先立つ学術的な判断がなければ踏切れる問題ではないはずである。それらの準備行動があつてのケネディアピールだとすれば、日本に先行すること実に 10 年である。最近の科学の進展速度から判断すれば、10 年というのは気の遠くなるほどの大きな差である。

専門の学者は、それぞれの専門の学問については将来の発展と、自分もそれに貢献するための方法とを常に真剣に探求している。しかし、領域の異なる諸学問を総合して取組んではじめて解決できる問題となると、相互の学問的要求を理解し、また総合のために必要な研究手法を見出すためにはある程度は準備期間はなければならない。大部分が未知のままに置かれている海洋のような大きな対象の場合には、学問的な分担と手法のとりまとめにも相当な準備期間があると見るのが至当であろう。

学問的な研究の段階に限ってさえそうだから、上記のアメリカの例のように国家的な大プロジェクトとして数千億円を投入するところまで進めるまでには、国としての政策の決定のためにさらに相当の期間が必要であろう。しかも時間の問題だけではない。学問的には実施必要と判断されていても、政治の上では採上げられない場合もあり得る。

海洋開発を例として引いたが、これにかぎらず、このように人類の明日を開く重要な研究について、専門の研究者がそれを予見して芽を育てたととしても、それが現実に結果するまでの道は遠く時間が長い。特にわが国においてはアメリカなどと較べれば、それが一層甚しい。このような環境にあるのが現実の姿である以上は、われわれとし

ては少くとも問題が学者の手中に在る時間だけでも短縮する努力を払わねばならない。しかも、最近のように社会の進歩が急速になれば、学問的な見通しをつけるための時間は長くは許されない。特にそれと気がつけば火がついたように性急にしかも一斉に騒ぎ立てる日本の社会では、学者サイドの準備は前もって十分に備えておかねばならない。

生研はわが国の大学の中では専門の異なる研究者間の協力と連絡がうまくいっているところだといわれている。事実、ロケット・耐震工学・環境工学などの研究では、その評価を実証する研究協力が行われている。しかしまだまだ十分とはいえないように思われる。生研の研究能力を結集するための努力は積極的に続けたい。

若い軟かい頭脳から生れる発想を大きく育てることは第 1 の課題であろう。江崎氏のダイオードのトンネル理論の発想は 32 歳のときといわれる。理学に較べて総合的な性格の強い工学では、知識経験の狭い若い間に大きな研究成果を生み出すことは困難だといわれているが、間口の狭い問題であれば若い人にもチャンスはある。これを育てるポイントは経験ある指導者との協力体勢の改善であろう。

第 2 の課題は、他の専門の研究者との研究協力の実力は具えながらも、遠慮勝に一研究室の枠内で研究を進めている研究者に、広場への進出を強力にすすめることではあるまいか、まず接触するところに協力のいとぐちが開かれる。

第 3 の課題は、生研の実力にふさわしく、社会的な提案を今少し積極化してはどうだろうか、生研の教授・助教授の中には、それぞれの専門の領域ではわが国の指導者としての実力を持つ人が少なくない。しかし、生研が研究所として国の研究活動について指導的な意見を公にした例は少ない。生研が指導的な研究能力を持つと自負し得る問題については、その研究の必要性を社会に訴えて、政策の中に取上げさせ、それを生研が解決する積極性があってもよいはずである。